新型コロナは「収束する」　連日１万人感染の今、その意味とは

2022/6/22 毎日新聞

マスク姿で通勤する人たち。新型コロナウイルス流行後の日常の風景だ＝東京都千代田区で2021年6月21日午前8時18分、長谷川直亮撮影

新型コロナウイルスの流行は「収束」に近づいている――。長崎大熱帯医学研究所の山本太郎教授（国際保健学）は現状をこう分析する。世界保健機関（WHO）がパンデミック（世界的大流行）を表明して２年あまり。国内ではまだ連日１万人以上の感染が確認されている。山本さんが言う「収束」の意味とは。【聞き手・渡辺諒】

社会に存在するもの」として認識

――新型コロナは今、どのような状況にありますか。

◆新しい感染症を引き起こすウイルスは、基本的に野生動物からヒトの社会に入り込み、その一部はパンデミックを起こす。その後、ヒトが集団として免疫を獲得することで社会にウイルスが定着し、ありふれた感染症の一つになる。もっと長い期間で考えると、ウイルスがヒトの社会から脱落することもあるかもしれない。

新型コロナは今、社会に定着しつつある段階だ。世界全体で見ると、集団免疫の獲得状況はまちまちだが、ワクチンの接種が進んだり、感染者がかなり多かったりした国では集団免疫ができ、医療崩壊などが起きなくなっている。我々はウイルスやそれによって引き起こされる病気を、排除の対象ではなく、「社会に存在するもの」として認識するプロセスに入りつつある。そう認識するようになることが「収束」なのだと思う。なぜならば、コロナがヒトにとって特殊な病気から一般的な病気になるからだ。

――根絶は無理だということでしょうか。

1回目の緊急事態宣言発令下の東京・丸の内のオフィス街。ランチタイムも人影はまばらだった＝東京都千代田区で2020年4月15日午後0時20分、小川昌宏撮影

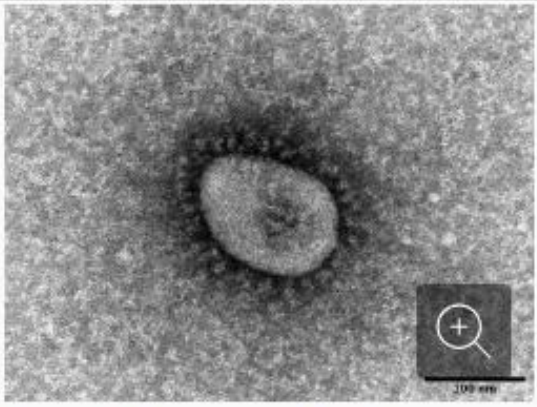
◆新型コロナに関しては、パンデミックと認識した時点で根絶が難しい状況になっていたと思う。ただし、それは初期段階で強い行動規制などをしなくて良かったという話ではない。どんな感染症か分からない状況では規制は必要だった。特に初期に無秩序に感染を広げてしまえば、医療などの社会インフラに対する負担が許容範囲を超えてしまう。初期の対応は厳しめに取りつつ、どこかで共存することを考えた対応に徐々にシフトしていくということだ。

――初期対応ではどんな課題があったと思いますか。

◆日本の場合、他の国と比べて明らかに死亡者数が少なく、初期の対策は成功したと思っている。しかし、学校の休校などによって子どもの発育に影響するような負の面があっ

たことも事実だ。スウェーデンのように強い規制をかけないやり方が良いという意見もある。高齢者施設でかなりの人が亡くなったが、若い人の生活を守るという発想だ。どちらが良かったのか、これは答えのない問題だ。

経済や社会活動をパンデミック前と同じように維持することと、人の命を守ることを両立させるのは、今までのところ実現していない。どちらかにウエートを置くという選択をせざるを得ない。どのくらいの配分でバランスを取るかに正解はなく、それは価値観の問題になる。新型コロナで得た教訓があるとすれば、パンデミックのような危機が起きたときに、社会としてこのバランスをどのように取るかというコンセンサスが重要だということになるのだろう。



国立感染症研究所で分離に成功した新型コロナウイルスのオミクロン株の電子顕微鏡写真＝国立感染症研究所提供

重症化しにくいウイルスに

――新型コロナは今後、一般的な風邪のウイルスになっていくということでしょうか。

◆そう考えている。例えば、10 年、20 年後のもう 1 世代後を考えると、彼らは乳幼児期に新型コロナに感染して免疫を得るだろう。ウイルスは変異するので、この免疫は完全には効かないが、部分的に作用して重症化を抑える。その後大人になる過程で、何度か感染を繰り返しながら、大人になって感染してもあまり重症化することのない感染症になるのだと思う。

将来的にもワクチン接種が必要かという議論もあるが、その時点での状況で判断することになるだろう。実用化されたメッセンジャー（m）RNA ワクチンは重大な副作用が少ない優れたワクチンなので、接種が不要とまでは言いにくい。一方で、予算や人的な負担がかかることも事実だ。無限に予算があるわけではない。優先度をどう考えるかということになる。